

世界遺産アカデミー認定講師 File No.9

このコーナーでは、マイスターの称号を得て全国で積極的に啓もう活動をされている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当て、お話を伺います。第9回はWHA正会員で世界遺産検定マイスターの山口利光(やまぐち・としみつ)さんです。

——世界遺産が視野を 広くしてくれました

16、7年前、ドイツのデュッセルドルフで開催された国際展示会を訪れた時、ケルンに宿泊しました。同僚の車で飛行場から街へと入っていくと、塔が2つ見えました。最初それが何か、わかりませんでした。街に近づくにつれ、塔はどんどん大きくなっていきますし、空高く見上げるほどの高さに驚きました。それが、ドイツの世界遺産「ケルンの大聖堂」だったのです。その時はまだ自覚がなくて、単に立派な大聖堂だなと感じた程度でした。ところが、後に、「ケルンの大聖堂」が世界遺産登録を外されて

しまうかもしれないというニュースを耳にしました。この時に初めて“世界遺産”を強く認識したのです。2006年に「ケルンの大聖堂」は危機遺産リストを脱しましたが、国内出張の機上で毎日新聞の世界遺産検定の広告を目にした時にも、真っ先に思い出したのは、ケルンのことでした。

第1回世界遺産検定で「シルバー」に認定されましたが、次に受検した「中級」は苦戦し、実は1度落ちています。中級は出題範囲が5つのエリアに分かれていましたので、2回目の受検では、どのエリアが狙い目なのか調べました。アフリカと北中南米の合格率が高いことに気づいて選んだものの、この2つのエリアは、私が受けた回では、とてつも

なく難しい問題内容でした。結果として、北中南米は合格しましたが、アフリカは通りませんでした。「ゴールド」に認定された後、検定のシステムが変更され、公式テキストも改訂されて、「1級」の受検を決めました。振り返ってみると、一時期、アフリカと北中南米に絞って勉強したことで、関心と理解の幅が広がりましたので、かえって良かったと思っています。と言うのも、海外出張を求められる仕事には就いていますが、実際に訪れた世界遺産の件数は、自慢するほどではありませんし、中欧の一部や、アジア圏ばかりで、イタリアにも行ったことがありません。都市の中にある歴史地区や旧市街が、どのように維持されていくのかに注目していま

すので、休暇を取って、トラムの充実しているドイツ語圏の世界遺産を巡りたいと考えています。ラオホビールをゆっくり飲みながら、「パンベルグの旧市街」を觀賞してみたりね(笑)。

世界遺産の学習では、類似の関連書籍を多く入手し、個々の物件について、複数の書籍から情報を調べました。また、ノートも作成しました。書くことで自分の頭の中の記憶が整理されます。最も勉強したのは「中級」と「1級」を受検した時でした。「マイスター」試験の時には、パソコンも使いました。表でまとめやすいですし、修正が簡単ですので、もっぱらエクセルを使用していました。当時作成したノートやデータファイルは、今でも活用しています。

ですが、以前は営業でした。営業分野で経験したプレゼンと、現在の人事としての経験の積み重ねがガイダンスに活かされているところもあります。

ガイダンスでは、導入部分を重視し、時間を使います。自分が世界遺産に関わったきっかけをトピックにしてみたり、検定ポスターになっている物件の背景をお話したり、参加者の方が快く聴く姿勢になっていただけように努めています。次にガイダンスの時間の流れをご説明して、実際の内容に入ります。ガイダンスの資料には、その都度、ノート形式で印刷して、余白部分に関連情報や自分なりに調べた情報を転記して知識をまとめておきますが、本

世界遺産のおかげで、宗教や歴史の勉強にも、真剣に取り組むようになりました。もともと地理は好きでしたが、歴史には疎かったのです。歴史年表を開くようにもなりましたし、世界各地の紛争にも目を向けるようになりました。紛争には歴史的、宗教的関連性を見出せますから、まさに、世界遺産によって平和の尊さを意識させられています。と同時に、世界遺産は、外国の仕事仲間との話題を広げられる便利な材料でもあります。韓国・慶州の蔚山(うるさん)にある工場に出張した時は、現地の方と石窟庵と仏国寺の話で盛り上がりしました。

番中は基本的にはその紙を見ず、皆さんの方に目を向けて話すようにしています。そのためにリハーサルを2、3回ほど行って、準備を整えます。皆さんの反応や空気感を得ることが大事ですし、スライドの移り変わるスピードにも対応しやすいですから。昨年11月に2級の1dayガイダンスを実施した際、質問待ちの長い列ができて、その中に、見覚えのあるお顔を拝見しました。NHKのBS報道番組「きょうの世界」の女性キャスターでした。お話を伺うと、世界の時事問題に報道として関わってきたけれども世界遺産についてはあまり知らず、勉強してみたいと思い、参加されたそうです。級が上がれ

——皆さんに快く、聴く姿勢に なっていたるように

認定講師になろうと思ったきっかけは、認定級を習得後に「ナビゲーター」となったことです。当時、WHA主任研究員・目黒さんと研究員・宮澤さん達が実施された研修を受け、「初級ガイダンス」を担当することになりました。仕事柄、パワーポイントを使い慣れていましたので、皆さんに問いかけながらガイダンスを進めていくことも、無理なく楽しめました。その後、「ナビゲーター」から「認定講師」制度へと移行し、私も1dayガイダンスを担当する認定講師のひとりとなりました。現在は人事職で

ば上がるほど熱意も高まり、質問の質も濃いものになります。特に、効率的な勉強方法については質問が多いです。

——世界遺産と自分との 本質的な繋がり

今後は、世界遺産に興味を持たれている色々な方々に、幅広く、ガイダンスをしていきたいと思っています。特定テーマに基づいたプログラムも企画してみたいです。先日、世界遺産クラブで「世界遺産とオペラ」というテーマで発表したところ、皆さ

んに喜んでいただけましたし、自分自身も、講演で扱うCDや画像の選択といった準備段階から楽しめました。テーマ自体を見つめる楽しみ、オリジナルを創る楽しみが、そこにはあります。また、忘れてはならないのが、世界遺産の保全・保護の問題です。ユネスコの理念や、危機遺産の現状、紛争や政治的背景などを、わかりやすく伝えていきたいと思っています。私は、マイスター試験で1,200文字の回答を実際に書いてみた時に、初めて、自分が今まで世界遺産について考えていた本質的な繋がりを認識することができました。世界遺産検定を勉強していく中で、認定講師になりたいと思われるのは自然な流れではないでしょうか。自分が楽しんで、うまく

内容が伝えてられて、相手が喜んでいてることを実感した時に、とても良いものが生まれますし、モチベーションにも繋がります。ガイダンスでは既にWHAが用意したパワーポイントを使用しますが、独自に作成する場合にも、ヴィジュアル・エイド(visual aid)には十分な時間をかける必要があります。認定講師を目指されている方々には、これらを踏まえた上で、更にリハーサル準備の大切さをお伝えしたいです。そして、必ずしも世界遺産を訪れた回数や多さではなく、自分なりに調べて理解した知識やこれまでの経験の蓄積が大切だと思います。積み重ねが多ければ多いほど、自信に繋がりますし、豊かな考え方を形成していくことができます。



音楽とビールをこよなく愛する山口さん